

東部瀬戸内海シャットネラ赤潮広域共同調査<sup>\*1</sup>

竹内照文・芳養晴雄

小久保友義・今原幸光<sup>\*2</sup>

## 目 的

東部瀬戸内海の水塊構造と水塊の動き、ならびに*Chattonella*のシスト分布密度および栄養細胞の発生、増殖について全体像を立体的に把握し、予察技術の確立に資する。

なお、解析結果について水産庁により印刷、送付される予定である。

## 方 法

調査は、播磨灘、大阪湾と紀伊水道で5月24日から8月31日まで合計23回、①水温、塩分の測定（73定点）、②溶存酸素濃度の測定（14定点）、③*Chattonella*栄養細胞の計数（73定点）、④*Chattonella*シストの計数（73定点:5月24日）、⑤栄養塩濃度の測定（14定点）、*Chattonella*以外のプランクトンの計数（14定点）について一斉調査を行った。

調査機関は、香川、徳島、岡山、兵庫、大阪と当県の6府県と8民間機関であり、各々の水域と調査日を分担した。

なお、当県は日本NUS (k.k) とともに紀伊水道北東部の7定点を分担し、項目の1、3、4について調査を行った。

## 結 果

*Chattonella*は8月上～中旬に播磨灘で赤潮を形成したが、全域に及ぶように広域化することなく、小規模なものであった。紀伊水道では赤潮を形成することがなかった。当県の分担した紀伊水道北東部については以下のように要約される。

1. 冬期の水温は平年に比べて高かったが、夏季は並みかやや高めであった。塩分は、平年並みからやや高めで推移した。

2. *Chattonella*は7月中旬から8月中旬まで出現していたが、最高2 cells.m<sup>-1</sup>であった。

※1 東部瀬戸内海シャットネラ赤潮広域共同調査費による。

※2 水産課